

西南戦争の錦絵 その実と虚

錦絵は庶民のイメージを投影する

西南戦争の錦絵で最も多く登場する西郷隆盛。多くは髭をたくわえた大礼服(?)姿である。顔立ちも様々で、現在の我々から見ると違和感があるが・・・
これが維新の元勳・陸軍大将として当時の庶民がイメージした西郷の姿なのであろう。



ごあいさつ

明治時代、「東京名物のひとつ」と称された錦絵（木版多色刷り版画）。当時の新聞には欠けていた視覚情報を補う報道媒体でもありました。

西南戦争の錦絵は人気を博し、何と 600 もの種類が発行されたといわれています。

その理由として・・・当時の大事件であった西南戦争については、各新聞社がこぞって連日のように報道し、そのため庶民の関心が高まったこと、一般的な錦絵大判 3 枚刷りが 6 銭（現在の約 1,500 円）と比較的廉価であったこと、が挙げられます。

下図に示すように、地方の神社の奉納絵馬にもこれを模したのがあり、西南戦争の錦絵がいかに普及していたのかがうかがわれます。



西南戦争の錦絵の多くは、東京や大阪の絵師が新聞報道や伝聞をもとに想像や脚色を加えて描いたもので、事実と異なる表現「虚」が多く見られます。

より面白く、興味を惹くように、売れるように・・・

報道媒体でありながらエンターテインメント性も重視されたものだったのです。人気を博したもうひとつの理由といえるでしょう。ただし、その「虚」には元ネタもあって、怪しげなものも含めた新聞などの情報「実」が根拠となっています。

本展示では、西南戦争の錦絵において情報「実」がどのように反映され「虚」となったのか、そのエンターテインメント性の実態を探ります。

第1章 判り易いアイコンを描く

有栖川宮の錦旗

政府軍征討総督 有栖川宮熾仁親王。野外の場面では背後に錦旗が描かれることが多い。

戊辰戦争の東征大総督であった宮を詠った流行歌トコトンヤレ節。

♪宮さん宮さん お馬の前にヒラヒラするのは何じゃいな

あれ朝敵を征伐せよとの錦の御旗じゃ知らないか トコトンヤレ トンヤレナ

という歌詞は庶民にも広く知られていた。

西南戦争で錦旗が掲げられることはなかったが、錦旗＝有栖川宮というイメージは庶民にも定着しており、有栖川宮のアイコンとして錦旗が描かれたのであろう。



第2章 絵と詞書とのギャップはなぜ？

絵の主役と詞書の主役

西南戦争の錦絵には、西郷・桐野等の諸将を大きく描いたり、薩摩兵が勇ましく戦う様子を主に描いたりするものが多い。ところが、そこに添えられた詞書には、主に政府軍の活躍が記されたものが多い。

例えば「官軍之を事ともせず・・・賊兵たちまち敗走」といったように、絵と詞書で主役が逆なのである。その理由としては・・・

購買層である庶民にとっては、英傑たる西郷率いる薩摩軍の方に親しみがあったこと、その一方、発行には検閲があつて、賊たる薩摩軍を賞賛するような詞書を書くことが憚れたこと、などが考えられる。



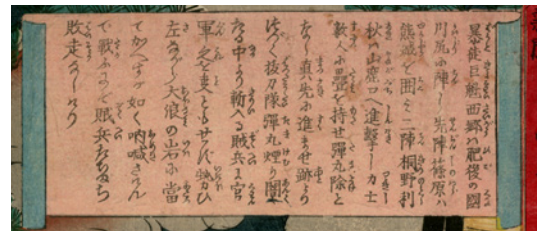
詞書（抜粋）

暴徒は突然として一手の兵を起せしが
いよいよ官軍進激なして 城の傍らに討しらませし
暴徒敗走に至り 兵器を打捨 散々に体を引退きける



詞書（抜粋）

官軍は植木の宿に攻め（中略）暫時の炮声一時は互いに
退きしが 暴徒は兵器を分捕され 散々其場を逃去りける



詞書（抜粋）

煙り闇々たる中より斬入る賊兵に 官軍之を事ともせず
勢いさながら 大浪の岩に当たつかえすが如く
吶喊さけんで戦うにぞ 賊兵たちまち敗走なしたり

第3章 嘘の情報をもとに描かれた嘘のシーン

野津少将と薩将桐野の一騎討ち

東京曙新聞 4 月 9 日の記事に・・・

桐野利秋が政府軍第一旅団長 野津鎮雄少将に果し状を送り、野津がこれに応じて一揆討ちに及び、勝敗はつかなかった、とある。

全くの嘘報であるが、このドラマチックな出来事を絵師たちは見逃さなかった。

一騎討ちの場合は、田原坂・植木口・山鹿口など様々。名場面は人気を博し、何度でも描かれたのであろう。

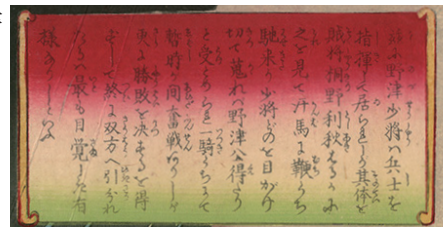
詞書も・・・

桐野が「汗馬に鞭うち馳来り、少将どのを目がけ切て蒐れば、野津公得たりと受けとめ・・・」

と、講談調に盛り上げた文体で書かれたものがある。



詞書



抜粋

賊将桐野利秋（中略）汗馬に鞭うち馳来り 少将どのを
目がけ切て蒐れば 野津公得たりと受けとめられ 一騎
うちにて暫時の間奮戦（中略）終に双方へ引分れたる

野津大佐 連隊旗奪還す

2 月 22 日、向坂の戦いにおいて小倉第 14 連隊が軍旗を奪われたことは、現在では良く知られている。

軍のシンボルであり天皇から賜った旗を奪われたことは、政権そのものの恥辱であり、政府軍本部はこのことが広まる前に窮余の策を講じた。

それは・・・軍旗は、川尻の戦いにおいて一度は奪われたが、すぐに野津道貫大佐が難なく奪還したと揚言し、これを錦絵に描かせたのである。

描かれた奪還の場所は高瀬・河内など様々である。これも名場面は何度でも、という錦絵販売の本質を示すものといえる。



籠城軍 熊本城内で酒宴？

朝野新聞 4 月 11 日の記事に・・・

「京町の紅君数十名城内にあり、折々三弦太鼓にて酒宴を催し賊軍に閑暇を示す」とある。

これを受けたものであろう。

熊本鎮台諸将が京町の芸妓をはべらせ、豪華な料理を前に酒宴を開き、城外の薩摩軍を「嘲弄」する様を描いた錦絵がある。

実際には、籠城軍の食糧不足は深刻で、野蒜を摘んでお浸しにしたり、馬・犬・蛙、はては猫まで食べられるものは何でも食べたという。

鎮台諸将の酒宴。到底、事実ではなかろう。



「熊本城ノ将校 賊軍嘲弄之圖」

第 4 章 報道を脚色してエンターテインメントに

脚色の代表—女隊の活躍

薩摩軍女隊についての報道はいくつかある。郵便報知新聞 3 月 29 日記事。兵士から聞いた話として・・・

「賊軍の鯨声を発する時、往々女の声を聞く。又、望遠鏡にて望み見るに、婦女子の薙刀を携へ駈馳奔走するを見ると。甚だ信じ難き風説なり」など、いずれ

も信憑性は低いとしているが・・・

この好材料は錦絵に積極的に採用される。

美人画は元々、錦絵の好画題でもあり、櫻がけで艶やかな着物姿で戦う美しい女隊が描かれた。

戦場と美人画。このバランスの妙は庶民の興味を惹き、人気を博したのであろう、女隊を描いた錦絵は多く、様々な場面で登場する。



熊本城下



吉次峠 個人蔵



二重峠 個人蔵



八代沖？



鹿児島城下



桜島 個人蔵

村田新八は二度死ぬ

東京日日新聞 3 月 5 日の記事。

2 月 27 日の高瀬の戦いにおいて「賊将村田新八、深手を負いたり。」とあるが・・・

錦絵では話が大きくなって、討死したことになり、深手を負って顔面蒼白な様が描かれたものがある。場所も高瀬ではなく、田原坂や山鹿口である。その後の大阪日報 10 月 5 日の記事では・・・城山の戦いで「村田は屠腹」、割腹自殺したとある。村田の自決は事実で、後、浄光明寺に仮埋葬される。

錦絵では、深手を負って刀を杖に最期を迎える姿が描かれている。

西郷の股肱 村田新八。錦絵の世界では二度死ぬ。



海上戦は無かった

東京日日新聞 3 月 8 日付などに・・・

八代沖に停泊中の薩摩軍の輸送船迎陽丸を巡視船が接収したという記事がある。

この時、船中に戦闘員はおらず、機関士・水夫など約 20 名を逮捕、刀剣銃砲弾薬を押収し、さらに龍讓艦にて長崎に護送したというものである。

ところが・・・これが錦絵になると、華々しい海上戦として描かれてしまう。

薩摩軍が政府軍艦船に小舟で漕ぎ着け、海賊さながらに乗り込むなどの場面で、詞書も「激戦数回」と戦闘があったことが明記されている。



第 2 章の補足説明（デジタル展示版のみ）

玩具絵にみる薩摩軍の人気

「物尽くし」のスタイルで描かれた子供向けの玩具絵。教材的な意味合いもあったとされる。

西南戦争を扱ったものには、勇壮な薩摩軍諸将や女隊の姿が描かれており、子供にアピールするものとなっている。

先に「購買層である庶民にとっては、英傑たる西郷率いる薩摩軍の方に親しみがあった」と記したが・・・

玩具絵はこのことを示す好資料といえよう。

右の作品は、西郷を豊臣秀吉、桐野を加藤清正、篠原を真田幸村に擬し（各名前は芝居名「真柴秀吉」など）、薩摩軍における 3 将の位置づけや関係を分かり易く描いている。



若き俊才 山崎年信は写真を見て描いた？

「明治名譽一覽」。明治天皇を中心に錚々たる新政府の顯官が並ぶ錦絵である。その大きな特徴は、通常とは異なり、各人の顔が本人と似ているものが多いことで、大変珍しい作品といえる。

その理由は・・・

明治2年頃から都市部に登場した写真舗にあったとみられる。

写真舗とは、写真館とは異なり、名所旧蹟・芸妓・役者・顯官・御真影など、風景や肖像写真の既製品販売を専業とした。廉価であったこともあって庶民の人気を博し、当時、多くの店舗があったという。

絵師年信は、恐らく彼らの肖像写真を実際に見た、あるいはその顔の特徴を人づてに聞いて、本作を描いたのであろう。

写真の大衆化をうかがわせる錦絵といえる。



錦絵と顔写真 多くは輪郭や髪型・髭の形が似ている。



写真出典 木戸：『松菊木戸公 下』1927年 山縣：『公爵山縣有朋傳 中巻』1933年
板垣：『板垣退助全集 上巻』1931年 ※以上、パブリックドメイン
三條・岩倉・大久保・川路：国立国会図書館『近代日本人の肖像』
谷：個人蔵 その他：熊本市文化財課蔵

西郷の首が飛ぶ！飛ばない！

一国政作 珍しい後摺の加筆

梅堂国政は絵だけでなく自ら詞書も手がけた才人である。

城山における西郷の最期を描いた彼の同じ作品には、首が幽鬼のように飛ぶものと飛ばないものがある。

前者は後摺の際に、加筆した（版本に彫り足した）ものと考えられる。

西郷に往古の反逆者 平将門のイメージを重ねた、エンターテインメント性を高めるための演出であろう。

後摺で彩色を変更する作品はしばしば見られるが、加筆するものは極めて珍しい。



後記

本誌は、令和7年7月より熊本市田原坂西南戦争資料館の体験学習ホール（無料コーナー）にて開催している展示内容のデジタル版です。

本資料館では、令和4年発刊の啓発冊子『年刊田原坂 vol.8』において西南戦争の錦絵を特集していますが、本展示は、これとはまた違った視点からの内容となっています。

なお、現地の資料館では、デジタル版に掲載していない展示資料もありますので、是非、資料館にお越しいただき、ご覧ください。

凡例 掲載した錦絵のうち「個人蔵」と明記したものの他は、全て熊本市文化財課蔵である。肖像写真については、下の欄に出典を記載している。

